

是におなじく陽氣の時いたれるに、温物を食すがゆへおふく是がために死す成べし。此理如何といふに、醫療に太陽より陽明病にいたり熱になる時は、大黃剤の寒藥を用、大陰小陰にいたり、熱陰に閉る時は、附子剤の温藥をもて病を治す。しかるに表性の陽病なるに温藥の附子を用へば、かならず命危し。亦裏性の陰なるに、寒藥の大黃を用ば、決て命保こと不能。將馬犬に時子烏頭の温藥を食せば忽死す。牛猫これを食すとも不死、全く馬犬は陽獸なり、牛猫は陰獸なるがゆへなり。此理をもつて陽氣にいたる時節に鰻を食すれば、かならず命危きを考ふべし。蓋鰻を毒魚としつて、食す者は大膽、毒なきものとこゝろへ食す者は愚人也。かならずしも主親につかふる人は是を食すことなかれ。はからず不忠不孝の名を下すべし。且其人品を損ふことなり。

〔牛馬問〕<sup>二</sup>河豚魚本草綱目無毒と有時珍の食物本草には、大毒有と見へたり。此魚きはめて氣有るものあり。又毒のなきもの有、故に世上其說まちく也。若此毒にあたる時は、藥物の解しがたきなり。近代薩州太守入國の時、西海にて小舟一艘御座船を呼はり、漕よする。何事やらんと猶豫の間、ほどなく御座船に近付、御船を見かけて願ひ奉る也。砂糖を下し賜はりなば、衆人の命たすかり候。御慈悲を以て、頂戴仕度旨ねがひける。其子細を尋させ賜へば、河豚魚の毒にあたり、九死一生に候。今少し時さりなば、一人も活する事を不得。砂糖だに候へば、みなく命たすかり申由願ふ。此事太守にも聞しめされ人の命を救ふに於ては、砂糖を賜はりなん。猶其實否を見届參るべき由被仰付。彼小舟に御近臣を添らる急漕出し、彼が所に至り見れば、衆人惱亂して、其言の如し扱右の砂糖を白湯に探し用るに、暫くの間に、ことぐく快然を覺て御高恩を謝しける。其妙なる事大守へ申上けると也。此事を尾州にても試たる人有しが、尤妙に彼毒を解したりと也。しばらく爰にして後人に備ふ。

〔松屋筆記 八十五〕魚毒の解藥河豚毒の解藥